

## 【名字】五郎丸(ごろうまる)

【全国では…】 8,288 位でおよそ 990 人が使用

### 【由来について】

- ①石などのゴロゴロしている場所や川、山などの石の多い場所、五郎という人物の居住地、開拓地が由来。(名字由来ネット)
- ②太郎丸はおよそ 130 人、現福岡県北部である筑前国穂波郡太郎丸村が起源(ルーツ)であるという説があり、惣領の長男に与えられた土地が語源という。丸は輪型の地形を指したものであろう。ここから推察すると、長男、次男、三男、四男、五男～に各々与えられた土地に付いた名前とも考えられる。(名字由来ネット)
- ③「丸」は丸いもの、あるいは丸々と太ったかわい子子供を指す「丸」で、それが貴族の人名「麿」などにもなった。また愛玩物としての刀や楽器、舟などにも付けられ、近世には館や郭、屋敷などの丸(一の丸、二の丸)にもなっている。開削地などにも「丸」を付け、それが地名となり、さらに名字へと展開したものもある。(『九州の苗字を歩く 福岡編』)
- ④「名字の『丸』は、九州北部では新田(しんでん)という意味で、五郎丸は福岡を中心に北九州から広島県あたりまでに多く存在します。他にも太郎丸、次郎丸、二郎丸、三郎丸、四郎丸、六郎丸、七郎丸、九郎丸が実在しますが、なぜか一番多いのが五郎丸なんです。残念ながら、八郎丸と十郎丸は確認できていません」(名字研究の第一人者森岡浩氏)

### 【ルーツについて】

- ①現福岡県北部である筑前国那珂郡五郎丸が起源(ルーツ)である。(名字由来ネット)
- ②福岡県の名字で、県内に広く分布する。山口県にも多い。(『難読・稀少名字大事典』)
- ③久留米市五郎丸という地名は鎌倉期～戦国期に五郎丸名(みょう)があり、近藤氏累代の館「五郎丸館」の跡や五郎丸駅もあり、現在の五郎丸町となっている。久留米市田主丸町にも戦国期から五郎丸があり、現在の田主丸町地徳の一部となっている。さらにもう一か所久留米市と小郡市にまたがった場所には江戸時代後期、久留米藩領の大庄屋組の一つとして五郎丸組があった。この3ヶ所はいずれも車で30分ほどの距離にある。筑紫野市には古墳時代後期の円墳として五郎山古墳がある。(『角川日本地名大辞典』)
- ④九州には次郎丸姓、太郎丸、二郎丸、治郎丸、三郎丸、四郎丸、五郎丸姓が集中している。次郎丸はおよそ 440 人で、現福岡県の一部と大分県北部である豊前、現福岡県北部である筑前、現福岡県南部である筑後、上総のほか各地にみられる。三郎丸はおよそ 150 人で、現福岡県の一部と大分県北部である豊前、現福岡県北部である筑前、現広島県東部である備後などの三郎丸村が起源(ルーツ)である。四郎丸はおよそ 180 人で、現福岡県の一部と大分県北部である豊前を始め四郎丸の地名多くみられる。近年、福岡県に多く特に田川郡川崎町安真木に集中してみられる。(名字由来ネット)

### 【発祥の地の現在】

2012 年 NTT 電話帳を基にした「苗字でポン」によると、ルーツとされる那珂郡は現在は筑紫郡那珂川町であり、同町に 2 軒の五郎丸家があることがわかります。

【名字】御手洗(みたらい, みたあらい, みてらい, みたいら, おてあらい, みたらし, みだらい, みてしろ, みてらし)

【全国では…】 2,561位でおよそ5,500人が使用

#### 【由来について】

①御手洗とは神の御前へと参る前に口や手を洗い、清める場所のことを言う。(名字由来ネット)

②御手洗の語源は神社の神域を流れる聖川で、そこで手を洗って清め神詣ですること。今は境内に手洗い場が設けられている。御手洗姓はそこから出たもので、多くは神社に奉仕する人が姓につけたもの。(『九州の苗字を歩く 大分・宮崎編』)

③この「御手洗」、現代では「おてあらい」と読んでトイレをさすことから、「御手洗」さんのルーツはトイレにある、と思っている人が多い。しかし、実は御手洗さんのルーツは神社にある。御手洗は、本来は「みたらし」と読み、「日本国語大辞典」には「神仏を拝む前に、参拝者が手を清め、口をすすぐための場所」とある。

伊勢神宮では、内宮の近くを流れる五十鈴川の河原が御手洗川と呼ばれ、参拝者はここで手を清めて参拝した。近くにこうした川のない鹿島神宮や香取神宮では、御手洗は池となっており、境内に御手洗池がある。

こうした御手洗は全国各地にあり、地名となったところも多い。なかでも瀬戸内海に浮かぶ大崎下島の御手洗は、江戸時代に西廻り航路が発達したことで重要な湊となった。(名字研究の第一人者森岡浩先生ブログ)

#### 【ルーツについて】

①現山梨県である甲斐国東八代郡の有名氏族、中臣鎌足が天智天皇より賜ったことに始まる氏(藤原氏)。ほか現福岡県北部である筑前にもみられる。福岡県、大分県、山口県などに現在多い。(名字由来ネット)

②大分県の名字。特に県南部の南海部郡(現在の佐伯市)に集中している。(『難読・稀少名字大事典』)

③駿河、常陸、美濃、周防、伊豫等に此の地名あり。

1. 藤原姓 甲州の東八代郡の名族にて、武田信虎家臣に御手洗新七郎正重あり、小石和筋小山西城主也。その男越前正吉・簡十郎、信玄に仕ふ。その男五郎兵衛直重(家康家臣)也。家紋丸に折入、五三の桐、鳩酸草。又下り藤也。その後は「直重一五郎兵衛家重一同忠重(宗明)一同正近一新太郎正矩」にして、五百石也。(『姓氏家系大辞典』太田亮)

2. 筑前の御手洗氏 嘉麻郡馬見城主毛利鎮實家人に御手洗五郎三郎才覺あり(続風土記)

④御手洗家のルーツは、河野や村上水軍豊後御手洗氏の出自が瀬戸内海の大崎下島であれば、その東隣には大三島(愛媛県)があり、古社大山祇神社は源平時代の奉納の武具(国宝)が多く、近世は海軍の神として有名となる。そんな立地からいって、御手洗姓もその社ゆかりの氏と考えられなくもない。

佐伯市の米水津から蒲江にかけては御手洗姓が多く、政治評論家の御手洗辰雄や御手洗富

士夫がいる。色利浦の高木氏はのち竹野浦の御手洗氏との縁から御手洗氏となり、正徳元年(1711)から米水津組の大庄屋になっている。それ以前の大庄屋は竹野浦の御手洗氏で、その末裔が元村長の御手洗玄一郎宅であった。その御手洗家の古文書には「米水津家」として佐伯水軍に属して働いた佐伯惟定の感謝状もあった。御手洗氏が率いたのは「下浦(米水津・蒲江)水軍」という。「裏(浦)方水軍」といって、正規の水軍をサポートする役割です。普段は漁師で、いざという時に武器を取ったというから「半漁半士」ですね…」(『九州の苗字を歩く 大分・宮崎編』)

⑤九州や伊予の大名は参勤交代の際に瀬戸内海航路を使うことが多く、御手洗湊を利用する大名も多数あった。そのため、現在でも御手洗という名字は大分県を中心に、九州東岸や愛媛県・山口県などに集中している。(名字研究の第一人者森岡浩氏)

### 【発祥の地の現在】

2012年 NTT 電話帳を基にした「苗字でポン」によると、大分県や愛媛県に御手洗家が多いことがわかります。

世帯数 地域名

22	大分県 佐伯市 弥生床木
17	大分県 佐伯市 蒲江蒲江浦
16	愛媛県 今治市 大西町紺原甲
11	大分県 佐伯市 長良小島
11	長崎県 対馬市 上対馬町鱒浦
9	大分県 佐伯市 米水津小浦

※以上のように多くの文献から名字の由来を推定し、さらに最も古い戸籍謄本の本籍地を辿ることでルーツを絞り込んでいきます。

〒120-0026

東京都足立区千住旭町 38-1

東京電機大学かけはし 414

ファミリーヒストリー記録社

TEL 03-5809-4688 FAX 03-5809-4660

<http://familyhistoryrecord.jp>

[info@familyhistoryrecord.jp](mailto:info@familyhistoryrecord.jp)

